



Title	「日本語を話す私」と自分らしさ : 韓国人留学生のライフストーリー
Author(s)	中山, 亜紀子
Citation	大阪大学, 2009, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49411
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	中 山 亜 紀 子
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学位記番号	第 22620 号
学位授与年月日	平成21年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化表現論専攻
学位論文名	「日本語を話す私」と自分らしさ－韓国人留学生のライフストーリー
論文審査委員	(主査) 教授 青木 直子 (副査) 教授 真田 信治 教授 杉原 達

論文内容の要旨

本論文は、留学生は日本での留学生活の中でどのように「日本語話者」というアイデンティティを構築していくのか、「日本語話者」としてのアイデンティティにどのような意味づけを行っているのか、日本語を学ぼうとする人と学びたくない人との違いはどこにあるのかを明らかにすることを目的としたものである。

本論文は7章から成っている。A4判207ページ、400字詰め原稿用紙にして約700枚の分量である。

第1章では、第二言語習得を題材とした自伝的小説と申請者自身の言語習得経験の語り为例にとり、言語学習体験はその人の人生と切り離しては考えられないものであることを述べ、調査協力者の「日本語を話す自分は自分のようではない」という発言がヒントになって、ある言語を話す「私」に対しての肯定的態度を「自分らしい」という表現でまとめることができると考えるに至った経緯を説明している。

第2章では、ある言語を話す自分に対する感情に関する研究を概観し、第二言語習得研

究の中で言語学習を言語の上達に限定せず、言語の学ばれる環境や学習者のアイデンティティも含めて考えようとする最近の研究を紹介し、その中で最も代表的といえる研究を批判的に検討したうえで、先行研究の限界を超えるためにライフストーリーを用いた研究方法を提案している。

第3章は、ライフストーリーという質的調査方法の意義について、哲学、心理学および社会学の研究に言及しつつ、詳細に論じている。

第4章は、本研究の調査とデータ分析の過程を詳細に報告している。

第5章は、5人の調査協力者のライフストーリーである。調査協力者は日韓共同理工系プログラムで来日した韓国人留学生であり、日本滞在歴は調査時点で4年から5年に及んでいた。

第6章は、5つのライフストーリーの比較分析である。申請者は「第一言語を話す私」と「第二言語を話す私」の関係を理論的に、1)両方とも同じで自分らしいと感じる場合、2)両方とも同じで、自分らしくないと感じる場合、3)二つは異なっており、第一言語のほうが自分らしいと感じる場合、4)二つは異なっており、第二言語のほうが自分らしいと感じる場合、5)二つは異なっているが、両方とも自分らしいと感じる場合、6)二つは異なっているが、両方とも自分らしくないと感じる場合の6つに分類する。協力者5人は上記の1)、3)、5)のいずれかに当たる。この章では、同じカテゴリーに属する協力者の共通点、異なるカテゴリーに属する協力者の相違点を探る形で考察が行われていく。

第7章はまとめである。本論文の各章を要約し、本研究の成果を整理し、今後の課題を提示したうえで、本論文の日本語教育への示唆で締めくくっている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、留学生の日本語習得を文法的正確さや語彙の多寡のような言語の問題として捉えがちであった日本語教育と、留学生が遭遇する困難を異文化適応の問題として捉えてきた留学生教育の両方を見落としてきた日本語習得とアイデンティティの関係をとりあげた力作である。第二言語教育の基底をなす応用言語学だけでなく、文学作品や他領域の研究にも幅広く言及した第1章から第3章の議論は非常に力強い。長時間のインタビューによって得られたデータを丁寧に読み込んで書かれた5つのライフストーリーにも説得力がある。5つのライフストーリーの比較分析では、1)日本語の上達には日本人学生との社会的ネットワークが大きく貢献しており、この社会的ネットワークには留学生が日本人学生から助けを得るだけでなく、留学生のもつ文化的資本(数学の能力、韓国語の知識など)が日本人学生に必要とされているという互惠的な関係があること、2)この社会的ネットワークの中で留学生のアイデンティティは常に再構築されており、「日本語を話す私」に「自分らしさ」を感じるかどうかは、来日前に持っていた「×××である私」というアイデンティティが再解釈され、新たに価値づけられるのをどのように受け止めるか、

あるいは「×××である私」をどのように提示できるかによっていること（例えば、この社会的ネットワークの中で価値をもつ韓国人というアイデンティティは、あくまでも日本人が価値を認めるアイデンティティであり、韓国社会における韓国人アイデンティティとは異なる。留学生は靖国問題など日本人に耳障りなことは話さないなどの調整をするかしないかという選択を迫られる。）、3）社会的ネットワークに時間的、感情的投資をするかどうかは、未来のストーリー（将来なりたい「私」像）が共有されているかどうかにもよること、などが明らかになった。これらはすべて先行研究にはなかった知見であり、本論文の成果として高く評価できる。

欲を言うならば、現在、留学生への日本語教育でとられている教授法を本研究で得られた知見とつきあわせて批判的に検討すれば、より具体的で包括的な日本語教育への提言ができたのではないと思われる。しかし、この不足は本論文の価値を下げるものではない。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。